

「ウィーンで華道（草月流）を教える」

～草月流・サチコ・シュミットさんに聞く

はち切れんばかりの笑顔で次から次へと飛び出してくるおしゃべり、体中から溢れるエネルギーはいつお目にかかっても変わらない。サチコ・シュミットさんは今年、古希になられます。見かけからはそれはちょっと信じられない。「お友達からいつも言われるのよ、『元気をもらいに来たわ。』って。」まさにその通り「元気」なお花の先生。元気の素はご主人でしょうか。ご主人のクルト・シュミットさんは1984年に日本の勲章、旭日小綬賞を、1988年には外務大臣表彰を受けられたほど日本を研究なさる親日家。そのご主人が校長をなさっておられた Volkshochschule Brigittenau（市民大学）で毎週、お花（草月流）を、オーストリア人やウィーンに住む日本人に、かれこれ30年近く教えていらっしゃる。その間、日本大使館広報文化センターで10回の展覧会、その他グループ展なども開催なさいました。現在、25名の生徒を教え、なかには20年間続けて通っている生徒もいます。



展覧会では毎回、限られた空間での展示方法やテーマなどを考えたりと、苦勞も多かったそうですが、やはり「失敗をおそれず、常に前向きに」が信条のサチコさんらしく新しいことに挑戦し、上から見る生花をテーマに床に直接花器を置いて見せたり、アクリル板を自分たちで加工した花器や、自ら焼いた陶器の花器を使ったりと、見る人を楽しませてくれます。「生け花は常に進化しなければならないわ。」とのお考えのもと、試行錯誤の日々だそうです。ご苦勞は普段の教室でもあるそうで、日本人とオーストリア人の生まれ持った感覚や生活習慣の違いなどから、お花を生ける前に礼儀作法からの指導が必要と実感され、初めての生徒さんには挨拶、はさみの置き方など、基本となることからの指導をなさっておられます。

オーストリア人の色彩感覚や美的感覚も日本人が持っているそれとは全く違うようで、「着物と帯の色の取り合わせが理解できないみたいなのよ。でも、アイデアはすばらしいの。こちらがびっくりするアイデアを出してくれるときがあります。建物、

絵画、音楽などの環境の影響でしょうね。」「生け花に通じる『当たり』アイデアの時はものすごくいいのだけれど、『はずれ』のときはさっぱり……。でも、おもしろいわよ。」と。違いを楽しんでいらっしやるようでした。



(2007年 草月スタディグループ展)

今でこそ日本人に対する感情も悪くなく、ウィーンは私達にとって住みよい街ですが、サチコさんが結婚を機にウィーンに来られた頃は、ご主人と一緒に過ごす時間も、珍しいものでも見るような視線を幾度も感じたそうです。外国人に対する感情が今ほど開放的ではない頃に生け花を教えはじめ30年も続けてこられたのは、生け花に対する思い入れと、「こちらの方々に日本の伝統的な文化を紹介し、人と人との理解を深めたいから。」というお気持ちからのようです。「生け花という文化を紹介することは私からの一方通行ではないのよ。たくさんの方々にオーストリア人からもらったわよ。」とサチコさん。これからはどんどんエネルギーに交流を深めていかれることと思います。

【内田 早苗】

<サチコ・シュミットさん (Sachiko Schmid) >

奈良県出身

- 1967年 東邦学園音楽大学（音楽理論専攻）卒
草月流習い始める
- 1973年 結婚
- 1976年 “インターナショナル生け花” 入会
- 1997年 草月流栄誉賞受賞（創立70周年記念）
“生け花20” グループ発足
第1回“生け花20”の展覧会（以後毎年）
- 2003年 “草月スタディグループ Vienna” 発足
第1回“草月スタディグループ Vienna” 展覧会（以後毎年）
- 2007年 草月流栄誉賞受賞（創立80周年記念）

